



診察室における言葉の玉手箱

【認知症編】

～第10回～

川崎幸クリニック院長
杉山 孝博

10. 「夕方になると“家に帰る”と言います」

《家族のみ受診》

家族「最近の父の症状について、先生から教えていただきたいと思ひまして、本日は私だけで参りました」

医師「結構ですよ。どのようなことですか？」

家族「夕方になるとそわそわして落ち着かなくなり、荷物をまとめて、私たちに向かって、“どうもお世話になりました。家に帰らせてもらいます”と、丁寧に挨拶して出かけようとするのです。“ここはあなたの家ですよ”と説得しても通じません」

医師「“夕暮れ症候群”ですね。これを理解するためには、“記憶障害に関する法則”の中の“記憶の逆行性喪失の特徴＝蓄積されたこれまでの記憶が、現在から過去にさかのぼって失われていく現象を言い、その人にとっての現在は、最後に残った記憶の時点になる”が参考になります」

家族「“夕暮れ症候群”と言うのですか。自分の家がわからなくなり、夕方になって症状が出るのはどうしてですか？」

医師「お父さんは、30～40年分の記憶をすっかり失って、30～40年前の世界に戻った人だと考えてください。そうすると、本人にとって、昔の家と雰囲気の違い今住んでいる家は他人の家であり、夕方になれば自分の家へ帰らなければという気持ちになるのだと考えれば了解できるのではないのでしょうか？」

家族「なるほど。同じ状況であれば私も同じ気持ちになると思ひます。では、どのように接したらよいのですか？」

医師「多くの方は、“お父さんが退職金をはたいて建てた家でしょう”（旧い家は）取り壊してありませんよ”“実家は遠いし、電車もありませんよ”と事実に基づいて説得しようとするのですが、大抵うまくいきません。なぜなら、本人にしてみれば、退職はしていないし、旧い家に今でも住んでいるつもりであるし、実家は歩いて帰れる距離にあると思っているからです。夕方から外に出られては困りますから、玄関に鍵をかけて出さないようにすると、“よその家に閉じ込められた”というとらえ方をし、大暴れするのも無理もないことです。拳句の果て、家族としては“こんな暴力的な人は家では面倒をみられない！”となるのです。

“この人は、お客さんにきているつもりなんだ”と発想を変えることです。その状態の本人の気持ちを一旦受け入れて、「お茶を入れましたから飲んでいってください」

「夕食をせっかく用意したので食べて行ってください」「最近このあたりはいり色な事件がおきて物騒です。暗い夜道で事件でも会われたら申し訳ないので、今日は一晩泊って明日明るくなってから帰るようにしてもらえば、私も安心です”などのように勧めると落ち着いてきます。それでも外に出ようとする場合には、「お送りしましょう」と付き添って行き、再び家に帰ると落ち着く場合が多いものです」

(つづく)





診察室における言葉の玉手箱

【認知症編】

～第10回（つづき）～

家族「なるほど、発想の転換が大事だと分かりました。でも、症状が長く続くと家族としては大変です」

医師「症状が長く続くかどうかは、本人のこだわりの強さや、周囲の対応の仕方によります。長野県のある認知症グループホームで、入所後間もないAさんは夕方になると“家に帰る”と言ってホームから出て行くようになりました。出るのを止めると混乱するので、スタッフは止めないようにしました。その代り、先回りして、偶然出会ったような調子で、“Aさん、どこに行くの？私も同じ所に行くので送りますよか？”（歩くのに付き合っ）疲れたので、そこの喫茶店でお茶にしませんか？”のように対応したら、早くおさまったと聞きました。知り合いのグループホームの管理者が会議に遅れてきたので、“何かあったのですか？”と聞きましたら、“3日前に入居した利用者が落ち着かないため、丸2日間昼も夜も一緒に付き合ってきました。外に出ていく時も一緒です。こうすると、ホームに早くなじんでもらえます。以前からやっている私のやり方です”と答えました。このように本人の思いに添って対応することがコツです」

家族「ありがとうございました。ところで、“記憶の逆行性喪失の特徴”にあてまはる症状は、ほかにありますか？」

医師「たくさんあります。認知症が進行すると家族の顔が分らなくなることがしばしばですが、昔に戻って、“子供は小学生で、妻は若い”と思っている人に、成人した子供や年取った妻が変わるはずがありません。また、10年前に亡くなった人が遊びにきた、という場合も、本人が10年以上前の世界に戻っていると考えれば、亡くなった人は生きていて遊びに来てもおかしくありません。旧姓で呼び掛けて初めて「はい」と答える場合も、結婚前の時代に戻っていると考えれば当然です。夫が隣の家の奥さんと話しているのを見て、激しい嫉妬妄想を抱いて夫を非難する場合、若い時代に戻った女性の嫉妬と考えれば納得できできます。

認知症の人の異常な言動に振り回されているとき、“記憶の逆行性喪失の特徴”に当てはまる症状に対して自分の対応がまずいのではないかと感じてほしいと思います。

対応の原則は、本人の世界を理解してこちらが合わせて、ドラマの俳優になってつもりで演技をすることです。現実を正しく理解させようとすることは混乱を深めることとなります。本人のしっかりしていた以前の状態を知っていて、認知症になったことを認めたくない家族には、本人の状態に合わせて演技をすることが難しいかもしれませんが…」

家族「分かり易く教えていただきましてありがとうございました」

